

免者、並不在赦限、但私鑄錢者降罪一等、其伊賀國司目已上進位一階、出瑞郡免庸、獲瑞人戶給復三年。

〔世事百談〕九尾の狐

玉藻前の謠曲にて、那須野の殺生石の故事を世人のき、なれ、かつ過ぎし年、妖狐傳といふ冊子なども印行したることありしからに、九尾狐といへば、惡狐とのみおもへり、ふるくも下學集、琉球神道記などにも、この俗説を載せたり、下野なる玉藻稻荷の社は、かの惡狐の靈を祭れりとかや、之かはあれど、九尾狐はもと瑞獸にて、已に太平御覽に、山海經、竹書紀年、吳越春秋、白虎通、古今注、魏略、郭璞、九尾狐贊等を引用せり、因に云ふ、官妓を九尾狐といへること、侯鯖錄にあり、これは官妓の聲色のために、人の盡惑せらるゝを、狐に魅さるゝに喩へしなるべし。

〔燕石雜志〕恠刀禰九尾附

唐山演義の書に、九尾の老狐化して、姪妃となり、紂王を盡惑せしよしを作りしかば、こゝにも好事のものありて、近衛帝の宮嬪玉藻前といふ狐妖を作り出せしは、謠曲の滑稽なるが、何人か序あやじう綴りなして、三國傳來の怪談なりぬ、この草紙久しく寫本にて行れしを、近曾繪にかき板に鏤てます、行れ、九尾の狐といへば、姪妃玉藻が事也と、俵子も合點せり、今按ずるに、九尾の狐は瑞獸也、呂氏春秋、禹年三十、未妻行塗山、恐時暮失嗣、辭曰、吾之妻必有應也、乃有白狐、九尾而造于禹、禹曰、白者吾服也、九尾者其證也、于是塗山人歌曰、綏々白狐、九尾麗々、成于家室、我都悠昌、于是娶塗山女、白虎通、狐九尾者何、狐死首丘、不忘本也、明安不忘危也、必九尾者何、

狐害

〔徒然草〕下狐は人にくびつくもの也、堀川殿にて、舍人がねたる足を狐にくはる、仁和寺にて、夜本寺の前をとる下法師に、狐三飛かゝりてくびつきければ、刀をぬきてこれをふせぐ間、狐二疋をつく、ひとつはつきころしぬ、二はにげぬ、法師はあまた取くはれながら、ことゆへなかりけり、